女性の参加者が男性より多かった研究集会

にいがた県民教育研究所第六回研究集会

二月二十日（土）～二十一日（日）の両日にわたって第六回研究所研究集会を開催しました。当日は、県内各所で会員および参加呼び掛けを行なった団体の関係する催しが行なわれ、参加者が少なくなるのではないかと危惧されました。

記念講演は著名な正木健雄氏（日本体育大）であり、パネルディスカッションを二日目に配置するなど、一定の配慮を行ない内容的には充実したものになるだろうという自信を持っていたのですが、やはり主催するものとしては、当日の参加者数が心配でした。定刻になる頃には百席用意した会場は補助椅子を使うほどになりました。（第一日目参加者数九十人余、ほぼ目標数）

長崎理事長からは「子どもたちにとって本当の『豊かさ』とはなにかを、本集会を通して語ろう」という呼びかけがなされました。

次いで、八木三男所長が「人間の破片ではなく」と題して基調報告を行ないました。（詳細は『教育情報』に掲載）一、子どもの問題の中心課題は何か。二、日本の子どもたちの環境の改善の問題。三、人間の破片ではなく――権利のための闘い――についてでした。

特別報告は二本で、はじめに桑原加代子さん（津南町議会議員）は「学校五日制と行政」について報告しました。地域における父母、PTA、行政の動きに触れながら、「学校五日制」は教育を国民の手に取り戻すチャンスであることを強調しました。

つぎに、豊栄市こまくさ乳児園の駒形正子さんから「こまくさ乳児園の子どもたち」の報告でした。核家族化、教育力を失っている地域、父母の長時間労働など、乳児が人間らしく育ちにくい環境の中で苦闘している乳児教育の姿をスライドを使った生き生きとした報告でした。野山で泥んこになって遊ぶ子どもの姿は感動的でした。

記念講演は正木健雄さん（日本体育大）で、長年月にわたる調査研究に基づくものでした。

「豊かさ」の中の子どもたちが本来放っておいても育った人間の諸機能・能力が「豊かさ」の中でむしばまれてきている。

「豊かさ」への適応現象は、体の退化ではないかという指摘は重要だと思いま

した。

正木さんの講演は、語り口が平易で、だけにでも説得力のあるものでした。

第一日目の日程はこれで終了し、引き続いて行なわれた懇親会は、講師を囲んで楽しい一時を過ごしました。

第二日目は会場を中央公民館に移し、九時から分科会に入りました。

分科会は三つで、①「豊かさ」の中の家庭、②通知表が変わった〜新しい学力観〜とはなにか、③学校五日制と地域・行政――三つの分科会とも所員（木村・片岡・小熊）が問題提起を行ない、討議をしました。

第一分科会

「豊かさ」のなかの家族

保健婦・主婦等十五（女十・男五）人で、「豊かさ」のなかの家庭の役割はなにかを話し合いました。「豊かさ」第一世代の母親家庭では、テレビを見ながら授乳、少ない声かけ、スナック菓子食べながらのテレビ、全身運動の少ない子育て傾向にあることが話されました。更に第二世代の子どもは塾・部活・マスメディアとの接点の多い生活、勉強勉強で家族とのふれ合いが少なく、子どもの自由な遊びが失われてきています。一方、父親の子育て参加が増え、人間らしい中身のあるふれ合いづくりや生きていて良かったといえる実感の持てる文化をみんなでという活動もあることも出されました。集まり、語り、活動し、喜べる時と場を地域にと話し合いました。

第二分科会

「通知表が変わった……」

通知表の評価項目（観点）が変わったことは、みなさんは既に承知していました。しかし、資料として出された某小学校の通知表が指導要録そのままの引き写しであるばかりか、記載された評価の観点が極めて抽象的であることに、みんな驚きました。子どもはもちろん、親が読んでも、何を学習し、どういう力をつけたいのか分からず全く要領を得ない内容だからです。しかもこの通知表は、これまでの個々の教員の工夫や努力を一切無視して上から一方的に押し付けられたものだといいます。

県内各地の通知表の実態をもう少し広範に把握し、「新学力観」にかかわる問題点も明らかにしながら、分析・検討する必要があろうと話し合われました。

第三分科会

「『学校五日制』と地域・行政」

「学校五日制」が実施されて学校現場にどんな状況が生れているかが話し合われました。

行政は、新指導要領と学校五日制の矛盾を棚上げして、授業時数確保のために、学校行事を見直しせよと通知しました。そのため学校はますます子どもの生きにくい場に変身しつつあります。

ついで、新潟県的特徴とも言える小中学校の部活過熱化の問題が出されました。五日制実施に伴ってスポーツ少年団の組織化が進んでいます。また、五日制による子どもの余暇時間が、塾やスイミングスクールなど、教育産業のターゲットにされる動きが出ていることが報告されま

した。学童保育や施設開放など行政の立ち後れが強く指摘されました。

パネルディスカッションは、司会を矢野教さん（新潟大学）、パネラーは髙橋武昌さん（新潟中野山小）、小林裕子さん（主婦）、山崎健さん（新潟大学）、ェイドリアン・コーエンさん（新潟大学付属中学校ＡＥＴ・英国）で、それぞれ十～十五分発言しました。

髙橋さんは、学校五日制の現状と、学校五日制を学校・地域の共同の力で、子どもの人間らしい発達に即した内実あるものにしていくにはどうするかについて発言しました。

山崎さんは学校五日制と子どものスポーツについて、子どものからだのおかしさを指摘しながら、子どもの遊びの崩壊、過熱化している部活とスポーツ大会。これが子どもの人格形成や身体的発達に及ぼす影響について発言しました。六十から七十％の学校が休日を部活に当てている実情について指摘しました。

小林さんは、親・市民の立場から「学校五日制」をどう見ているかについて発言しました。新潟市教委の調査では、五日制による休日を、家庭や地域のスポーツ・文化施設で過ごさせたいと考えている親が七十％にも上っている状況にふれ、子供が休日を過ごす施設が北陸四県（新潟・富山・石川・福井）の比較で新潟県が最下位であることを指摘しました。

コーエンさんは自分の小中学校の頃のことを、純粋に個人的な経験だとして発言しました。学校制度の違いに触れたあと、日本の同年代の子どもに比べ、ずっと伸び伸びした暮しであったことを具体的に話しました。例えば、一日のうち、学校での暮しより、放課後帰宅してから友人と地域で遊ぶほうがうんと楽しかったことなどです。これは日本の子どもの日常の暮しがあまりにも異常であることの指摘でもありました。

以上四人の発言に対してフロアーからの発言も多くありました。

以上が二日間にわたる研究集会の概要ですが、もう少し参加の様態や、若干の反省点について述べます。

①参加総数は先に述べたとおりですが、二日間の延参加数は百六人でした。男女別では、男性四十一人、女性六十五人で女性の数が上回りました。これは研究集会初めてのことです。研究所会員が六十人、非会員が四十六人でした。職種別では、保母、公務員、主婦、労働者、学生、医師、職員、教職員と広汎にわたっていますが教職員の二十％は少なすぎます。

参加層が広汎にわたっていることは、わが研究所が市民レベルの開かれた研究所であるという研究所の性格からして当然のことと思われます。それに教育問題の深刻さが、広く各層の問題意識になっていることの現われであると思います。

研究所の研究対象は主として学校教育にあるわけですから、教職員の参加数の少なさは大きな問題であり特別な手立てをしていかなければならないと思われます。

②基調報告や記念講演を、特別報告・分科会・パネルディスカッションの中にどう位置付けるかという問題です。正木講演はそれなりに大きな意義がありました

が、これが第二日目の討論に発展的に位置づかなかったのではないかということです。

③若手教員や婦人教員から多く参加してもらうため意見を聞く必要があるのではないかということです。

④通知表・新学力観については研究所が緊急に取り組まなくてはならない課題だということが明らかになったことです。

⑤企画運営上の問題で分科会を研究所が請負ったことはよくなかったのではないかということです。

⑥今集会は、財政的には赤字を出さずにすみました。主たる原因は、第二日目の会場を中央公民館を使ったことにあります。

さいごに

今集会を新潟日報社、BSN新潟放送、NHK新潟放送局が後援してくれたことに見られるように、県民の期待に応えるものであったこと、市民からの問い合わせが次々と寄せられたことなど有意義なものであったと自負しています。

秘密の空間

近所に住む小学生の男の子たち、四月から黄色い帽子の一年生を一人加えて四人になった。いちばん年長の六年生の子はさすがに分別らしい振る舞いをみせるが、三年生と四年生の二人はいかにも腕白そうである。私の家から道路を隔てた真向かいに小さいけれども素敵な玩具屋ができて、駐車場を兼ねた店の前のコンクリートのたたきが、いつからか彼らの朝の集合場所になった。とはいっても、多分お互いにさそい合ってくるのか四人はいつもいっしょに現れる。

朝の七時半、玩具屋の店のシャッターはまだ開かない。子どもたちはランドセルを下ろしてシャッターに寄り架け、コンクリートに尻をついたりして、ひとしきりそこで遊びに興じる。登校時刻から逆算しての時間待ちなのであろう。

ある朝見ていると、四年生の子が、なにかわざとらしい忍び足でシャッターの郵便受けに近づいていく。郵便受けに差された新聞を横にずらして、そこから中を覗きこんだ。それから大げさにびっくりしたような仕種をしてみせ、三年生を手招きする。三年生もそろりそろりと近づいて中を覗く。「ぼくにも見せて」というように一年生が駆け寄る。最近はそうした行為を制するかのように見えた六年生も、遂には同様に覗きこんだ。

薄暗い店の空間は輪郭のない夢のように広がり、そこに、彼らはメルヘンの世界を垣間見たに違いない――リカちゃん人形がほほ笑んでいる。ガンダムと呼ぶプラスチックの騎士が叫んでいる。カッコいい「ミニ四駆」。新幹線「スーパーひかり」が疾走するオルゴールの爽やかなメロディや消防自動車のサイレンの音まで、彼らには聞こえてくるのかも知れない……小さな「秘密の空間」をそれぞれの胸に秘めて、子どもたちはきょうも元気に登校して行った。

（か）